

英語科における「教科指導」と「生徒指導」

Teaching and Disciplining in English classrooms

築道 和明*・田尻 悟郎**

Kazuaki TSUIDO Goro TAJIRI

0 序

一般に中学校の教員には、「教科指導」の他に「部活動」と「生徒指導」の力量が求められる。また、これら三つの領域において適切な指導が出来て初めて一人前の教師であると言われることがある。その言説の是非は別にして、これら三つの領域の中で、経験の浅い教員が特に困難を感じるのは「生徒指導」の分野であろう。

本論文は、英語科教員養成において「生徒指導」に関わる領域をどのように位置付けるかに関して2つの観点から考察を加えるものである。具体的には、(1) 英語力（特に英語の読解力）を伸ばすと同時に生徒指導に関する認識を深めるための「比較文化的アプローチ」と(2) 生徒指導についての具体的なイメージを学生に喚起するための「事例研究的アプローチ」の2つを提案する。

ここで「生徒指導」という言葉の定義を明らかにしておく。本論文では「生徒指導」という用語を教科指導の前提となる教員と生徒との間の望ましい人間関係を構築しようとする教員側の試みに対して、直接的、間接的に作用する様々なマイナス要因に対する個々の教員の取り組みという意味合いで用いることにする。従って、例えば「困難校」と呼ばれる学校における生徒指導は、その解決のためには学校全体の適切な生徒指導システムの確立という点が要求され、個々の教員の努力では解決できない要因を含んでいると考えられるので、本論文では考察の対象外とする。

1 新任教員の悩み

まず、大学を卒業した新任の英語教員が直面する生徒指導上の問題を具体例に基づいて検討してみよう。以下の事例は、筆者らが直接、間接に耳にしたり、あるいは体験した内容に若干の修正を加えていることを最初に断っておく。

- 授業中にグループ活動を行うが、活動に参加していない生徒がいる。また、協力していないグループが存在する。
- 授業開始のベルが鳴っても席についていない。

*島根大学教育学部, **島根町立野波中学校

- 課した宿題を提出しない。それが積み重なる。
- 授業中に無表情あるいは、つまらなそうな表情をしている。
- 教員に面と向かって「嫌いだ」と発言する。
- 教員の指示や説明に対する反発が日常的にみられる。
- 忘れ物が多い。

このような生徒の問題行動に直面した場合、経験の浅い教員は「直接的な対応」をとる傾向があると言える。つまり、「グループに協力して一所懸命活動に取り組みなさい」「席につきなさい」「何故宿題を出さないのか?」「どうしたのか?」「何故嫌いなのか、どこが気に入らないのか」というように、生徒の行動に対して生徒自身に直接的に説明を求めたり、マイナス行動を「望ましい」行動に短時間のうちに転換しようと「正論による説得」という手段によって解決を試みる。しかし、こうした対応は、しばしば、さらに事態を深刻化させるきっかけになる危険性をはらんでいることには気付かない。

また、新任の教員には「生徒に好かれたい」「生徒から嫌われたくない」という心理が働いて、個々の問題行動に対して大目に見る、見て見ないふりをするということも上述の問題の背景には存在している。

英語科の教員の場合、その教科の特殊性故の生徒指導上の難題も存在する。すなわち、教員が一方的に「語る」ことにより授業が成立するということは通常考えられず（現実にはそうした一方的な「語り」による英語の授業も存在するが）、授業成功の前提条件として教員と生徒との、あるいは生徒同士の言語による意志疎通という視点が不可欠である。そうした前提条件が生徒側の問題行動により阻害されている場合、授業自体もうまく運ばなくなり、「生徒指導」が「教科指導」にマイナスに作用し、授業も成立しない、生徒の問題行動も解決できないというジレンマに教員は追い込まれてしまう場合もある。

もちろん個々の生徒指導の事例において「万能薬」は存在しないだろうが、こうした葛藤状況において、より良いアプローチの方法、あるいはより望ましい教員側の心のコントロールの方法はあると思われる。それは、例えば経験を重ねた教員による「経験知」に基づく場合もあろうし、心理学や教育学からの知見による場合もあろう。そうした助言や知見を手に入れることができる新任教員は幸運であるが、時として誰にも相談できず、あるいは相談したとしても適切な助言を得ることができず、一人で問題を抱え込み、やがて教職を離れていくというケースもゼロとは言えない。

2 基本的な指導方針

三浦（1991）は、生徒の問題行動により授業が荒れ、教員が自信喪失に陥っている場合には、教員の危機救済を第一に考えるべきであるとして、具体的には以下の4点を指摘している。

- (1) 授業がうまくいっている振りをしない。「こまった、もうだめだ！」と公言する。
(うまくいっている振りをしていると、誰も心配してくれない。いざという時に相談できない)
- (2) 「私の授業が荒れていたって、それで世界が滅びるわけじゃあるまいし」とたかをくくってみる。(自分を責めて事をすごす小心さは美德でもなんでもないのでから)
- (3) 「春になったら先生を辞めよう」と自分に言い聞かせる。辞めて、好きな英語で身を立ててゆけるように、がむしゃらに英語力を高める。(筆者もこの方法で英検1級、通検2級とガイド試験に挑戦した。大学時代の友人は本当に教師を辞めて大学院に入り、今では助教授になっている)
- (4) 生徒を研究対象とし、「授業の荒れ」や「学力不振」に関する研究に着手する。そのために、観察対象として生徒を見る。(どんな問題行動も、研究対象として向き合うと毒気を失ってしまう)

いささか過激な主張ではあるが、これらには「生徒指導」で悩む教員に有益なヒントが内包されている。

第一の視点は、自らが抱える問題を他の教員と共有する必要性を我々に再認識させてくれる。また、教員が気軽に悩みを打ち明けられる職場環境の構築という課題を提示している。「生徒」対「教員」のコミュニケーションの前に、「教員」対「教員」のコミュニケーションが実現されていなければならないということである。

(2)(3)の視点をまとめると「心理的な余裕、ゆとり」ということになるだろうか。言い換えるならば、「生徒指導」で指導する立場に立たなければならない、あるいは問題行動の解決に責任を負わなければならないとする教員の心理的な「鎧」を脱ぎ去るということである。教員としての職責を全うすることの必要性をもちろん否定するわけではないが、しかし四六時中、自らの責任を感じつづけるということは決して問題の解決にはつながらない。

そして、第四番目は、「客体化」「相対化」というキーワードでまとめることができよう。問題行動をとる生徒に改善を求める直接的な働きかけをするのではなく、問題行動をとる背景は何かを探ることであり、問題行動をとる生徒の立場に自らを置いてみるということである。

これら四つの観点の中で教員養成段階において取り入れることができる視点としては、第四の問題行動を「客体化」する、「相対化」するというアプローチであると言えよう。以下、この点を中心に2つの提案を行う。

3 比較文化的アプローチ

自己を客観的に把握するための最も一般的な、かつ、容易な方法は、他のものと比較するということである。具体的には、英語科の場合、特に英米語圏での「生徒指導」に関する資料、文献を理解する、それと日本の現状との比較を行うということが中心になろう。¹⁾ 英語教育関係の学術雑誌にも近年では、「生徒指導」の観点からの考察も見られるようになった。例えば、Wadden & McGovern(1991)は、授業中の問題行動の類型化を試み、さらにそれぞれ対

する解決方法を提案している。その中では西洋における「体罰」の歴史的な考察が見られたり、個々の問題行動に対する原因分析やユニークな対応策が提案されている。一例を挙げると授業中の居眠りに対して、解決に着手する前に、まずは居眠りという行為の背景要因に教員は思いを巡らす必要があると次のように述べている。

Sometimes there are good reasons why a student falls asleep at the desk. Prescribed medications and sleep deprivation due to a family crisis are among the possible causes. The instructor is wise to inquire discreetly at some point why the student is so tired. (p.122)

また、教員としての自身の体験を綴った Johnson(1992) には、「居眠り」常習犯のある生徒に対して教員が頬にキスをするという少々過激な対応策が記述されているが、キスのあと次のようなやり取りがなされている。

“Don’t waste your time,” I explained. “You can’t wipe it off.” I turned to face the class. “Does anyone know what indelible means?”

“It means you can’t eat it, I think,” one boy ventured.

“You’re thinking of inedible,” I said. “Inedible means you can’t eat it. Indelible means you can’t erase it. This is special, indelible lipstick I’m wearing. It cannot be erased. You can wash it off your face, but the lip print will remain on your face forever, like an invisible scar.”…… (中略——築道)

“If you look in the mirror, you won’t be able to see the lip prints, but everyone else will be able to see them, if the light is right,” I told Denzel. “I’m sorry, but I just can’t resist. If you fall asleep in my class, I have to kiss you because you look like little angels when you’re sleeping.” (p.59)

半信半疑の生徒たちを納得させるために、さらに翌日、Johnson は同僚の教員に協力を仰ぎ、自分の教室に用事で来てもらった際に次のような演技をしてもらおうのである。

“Are those lip marks?” Hal asked, feigning astonishment.

Denzel quickly raised his hand to his cheek as the remainder of the students stared, mouths agape. Hal smiled and nodded.

“She caught you sleeping, huh?” he whispered conspiratorially. (p.60)

このような英文による「生徒指導」に関する読み物は、学生の英語の読解力を伸ばすということ以外に、「生徒指導」へのアプローチに関して新たな視点を提供してくれると考えられる。また、こうした英米の学校教育に関する文献は、英語の「読み物」としての価値だけではなく、前述した「客体化」「相対化」の手段としても有効と思われる。

先の例では、「居眠り」に対するユニークなアプローチをみたが、Wadden & McGovern (1991) には、三浦(1991)で提案されている生徒指導に対する基本的な方針との類似性も見られる。例えば、以下のように教室での生徒の望ましい行動についての指針を明示すべきであるとする点において両者に共通する主張が見られる。

The first step in minimizing negative class participation is to make clear to the students what behaviour is unacceptable in the class. A list of class guide-lines can be handed out with the course syllabus as a form of teacher-student pact and then retained by the students with their course materials.Class guide-lines should not be a list of warnings, but rather illustrations of contrasting approaches to the class. Students deserve to have an understanding of what the teacher expects of them, and of how their test scores and performance of in-class activities will result in positive or negative evaluation. (p.121)

意外なことに、教師はこういう要求を生徒に向かって表明するのが下手である。またあきらめるのがとても早い。教師は言ったつもりでも、生徒には伝わっていないことがよくある。要求は「生徒に何をしてほしいのか」をはっきり言うことが必要だ。(p.13)

また、英語を通して「生徒指導」に関わる文献を読むというこのアプローチには、「生徒指導」に対する認識を深めるという利点に加えて、英語表現を伸ばすという副産物も期待できる。「私語」「体罰」「遅刻」「保護者との三者面談」などの教育に関連する概念を英語でどのように表現するかに関して、こうした文献は有益な情報を提供してくれる。

これらの「教育」に関わる概念を英語で表現できるという力は、現状のカリキュラムでは保障されているとは言い難い。英語という言葉について、あるいは、英語の背景知識については英語学や英米文学関連の講義や演習を通して学生は学ぶことができる。また、英語習得の過程や英語教育の指導方法についても英語で学ぶ機会はある。しかし、教育に関連する事物や事象について英語でどのように表現するか、説明するかという視点は現行のカリキュラムでは保障できていない。²⁾

4 事例研究的アプローチ

第二の方法は、事例研究によるアプローチである。現実の問題事例を素材に解決策を探るという方法である。このアプローチに関しては、現場の教員と教員養成機関との連携が前提となる。なぜならば、生徒指導上の具体的な問題を教員養成に携わる人間（少なくとも築道）は、熟知していないからである。英語科教員で、かつ生徒指導に優れた力を発揮している教員が身近におり、情報を提供してもらい、また、成功事例を提案してもらい、ということが教員養成機関で実現すれば、本論文の冒頭で述べた新任教員の悩みもある程度は軽減できるのではないかと期待される。

以下、筆者の一人（田尻）が（１）実際に経験した生徒指導の体験例（中学２年生の女子バレー部部員への指導）を示し（４.1～４.4）、（２）教材化を図るための視点を探ってみる（４.5）。

4.1 問題行動の背景

本校２年生は男子20名、女子18名、計38名のクラスである。僻地小規模校ゆえ、小学校入学から中学校卒業まで同じクラスであり、一度できあがった人間関係をずっと引きずるという短所がある。小学校６年生の時、女子はライオンカップバレーボール大会で県代表として全国大会に出場した経験を持っている。小学校は男子はバスケットボール部、女子はバレーボール部しかなく、ほとんどの者が入部していた。本件は発端がその当時にさかのぼる。

当時の小学校バレー部では、レギュラーをはずれた者は一度も公式戦に出場する機会を与えられず、それを気にしたレギュラーの選手が控えの選手に気を遣い、表面的には仲がよいが、お互い本心を語れないといういびつな人間関係ができあがった状態で中学校に入学してきた。

本学年女子は、中学校に入り８人がテニス部に入部したが、10名の者はバレーボールを継続することを選んだ。その中で、小学校時代控えであった選手は、かなりの葛藤の末、中学校での新しいチャンスに望みを託して入部してきた。

中学校のバレーボール部の顧問の先生は教職６年目。誠実、実直な人で、教科指導も部活動指導もとても熱心であり、私（田尻）から見れば申し分のない先生である。

生徒たちは小学校での「勝つための部活動」に疲れており、中学校では皆が平等にバレーボールを楽しみたいと思っていたようだ。しかし、現実はそんなに甘くない。スポーツの世界は常に勝ち負けが関わってくる。必然的に力がある者が選ばれる。小学校の先生は有無を言わせない指導をされていたようだが、中学校の顧問の先生はじっと我慢をされるタイプなので、子供たちの不満は一気にこの先生に対して爆発した。

当時２年生（現３年生）は３人しかおらず、しかも皆最初はテニス部や音楽部に入っていた子たちであり、保護者のバレーボール部を存続させたいという一念で説得され、中途入部してきた者である。彼女たちは小学校６年生の時、全国をねらう５年生の陰に隠れて辛酸をなめてきた経験があり、中学校の顧問の先生は彼女たちを熱心に育てておられた。

２年生（現３年生）：３名（中途入部者）

１年生（現２年生）：10名（うち、４名は小学校時代公式戦出場経験なし）

バレーボールはベンチンできるメンバーが12名であり、本校バレー部では１名ほど背番号がもらえない者が出てくる。昨年３年生が引退した後、秋の最初の公式戦のエントリーメンバーが発表されたとき、その１名がついに不満をおちまけた。「なぜまた私だけが背番号がもらえないのか！」

心の広い顧問の先生はその言葉を受け止め、慰めながらも説得をされたようだが、やり場のない同情を感じたレギュラー陣も先生に対して不満を次々に口にした。試合があるごとに保護者の差し入れのジュースや果物を当たり前のように食べてきた彼女たちは、その後わがままが

どんどんエスカレートしてきて、先生や上級生に対して次々と不遜な態度をとった。

ある日、度重なる反抗的な態度に業を煮やした顧問の先生が、緊急ミーティングを開かれたが、そこでも生徒は一方的に先生を批判した。その後、事態の深刻さに悩まれた先生は、保護者を交えて今後の部活動のあり方を生徒たちと話し合われたが、そこでも親の言葉をして、「手のつけようがないほどの荒れ方で驚いた」状態で、袋小路に迷い込んだ様相を呈した。

〔顧問〕生徒の態度に節度がない。気持ちは分かるが、我慢することも教えなければならぬ。どうしてあそこまで反発するのか理解できない。

〔生徒〕全員が同じ気持ちではないが、歩調を合わせなければならない。先生の前で思いを述べたとき、勢いで本心でないことも言ってしまった。だが、バレー部の保護者会で親の前でも同じ態度をとったので、もう後には引けない。世間でもいろいろ言われているようだし、学校でも味方がいない。信用できるのは、自分達1年生バレー部員の仲間しかいない。

4.2 教員による指導

私は当時生徒指導主任であったのだが、この先生のプライドを尊重していっさい口出しはしなかった。しかし、毎日のように隣のコートで練習をするバスケット部の男子が「あれはいくら何でもひどいから何とかしてくれ」と直訴しに来たので、ついに出しゃばって1年生女子を全員図書室に集めた。

かなり計画を練った末に行った指導は、次のような手順である。

- 1)今とっている態度は社会的に認められるか考えさせる。
- 2)それによって、2年生や顧問がどれほど苦しい思いをしているか考えさせる。
- 3)自分たちも苦しいことを再認識させる。
- 4)良心の呵責にさいなまれ、辛い思いをしている者もいることを知らせる。
- 5)中学校は心が揺れ動く時期であり、勢いで怒りをぶつけることは誰にでもあることを認める。
- 6)バレーボールが好きで入ってきたのに、自分たちでバレーボールができない状況を作り出していることを理解させる。
- 7)アンケートに本心を記入させ、全員で焼却炉で燃やす。

生徒の本心を引き出すために、私はあくまで中立的な立場をとった。このような場合、生徒たちを攻める一方では、よけいにかたくなな態度をとるようになるからである。このミーティングでは、「誰にとってもメリットがない」「双方が辛い思いをしている」ということをわからせることに主眼を置いた。

上記1)、2)は今までに言われ続けてきたことなので、生徒たちは表情が硬かったが、3)~6)の部分になると、やはり苦しい思いをしていたようで、こちらが彼女たちの立場に理解を示す

と次第に緊張がほぐれていき、つり上がっていた目からいつしか涙がぼろぼろとこぼれ始めた。

この間、約30分。生徒指導担当である私がついに招集をかけたことで、彼女たちは厳しく叱責されるかもしれないと緊張していたようだが、こちらが歩み寄ったことで外套を脱いだ。

7)の部分では、彼女たちは今まで言えなかった気持ちを正直に書き綴った。私以外は誰も見ない、書いた直後にみんなでアンケート用紙を焼く、という前提であったので、よけいに書きやすかったかもしれない。焼却炉に集まったときは、久々に明るい笑顔で話しをしていた。

テレビドラマでは、次の日は1年生と2年生が張り切って練習に打ち込む場面が登場するだろうが、現実はそんなに甘くない。これは彼女たちと私との間でのことであり、顧問の先生と2年生の3人と直接話しをして心情を吐露したわけではない。また、それぞれがお互いに何を書いたかは知らず、全員が気持ちがそろっているかどうかは生徒自身は確認できていないからである。

4.3 指導後

この一部始終は、生徒を帰してから顧問の先生に伝えた。翌日から彼女たちは練習に復帰したが、最悪の状態は脱したものの、まだ満足できる状態ではないとのことであった。

それから3ヶ月後、5月連休に大会があった。試合前の練習時に、私は「世間で言われている噂を吹き飛ばせ！」と檄を飛ばした。へたくそながらもこつこつと練習を重ねてきた3年生はよく動いたが、2年生の主力3人のうち2人が、試合の最後まで体力が持たなかった。練習を怠ったつけが来たのである。特に、小学校時代全国大会出場の原動力となったエース2人は、数日後「あのときは相手コートが見えなかった。目の前が真っ白になっていて、早く代えてほしいと思っていた。」と正直に語った。

1ヶ月後、八束郡の総合体育大会を迎えた。この大会前、3年になった3人は「最近はまだまあよくなったけれど、総体には間に合わないだろう。」と言っていったが、まさしくその通りだった。ただ、最後は3年生が力及ばず敗れた。拾って拾って拾いまくる姿は見ている者を感動させたが、所詮体格の劣る彼女たちのアタックは、次々と相手のブロック網に引っかかった。敗者復活戦も惜しいところで終わり、3人の3年生の中学校でのバレーボールは終わった。ひとしきり泣いた後、キャプテンは残りの2人を連れて、廊下の隅でうずくまる2年生の前に歩み出た。そこで彼女はこんなことを言った。

「今日は自分たち3年生の力がなかったから負けてしまった。決して2年生のせいじゃない。でも、私たちは下手なりにがんばったつもりです。2年生は力があるチームだから、一生懸命に練習をして悔いのない中学校での部活動をしてほしい。今まで私たちにつきあってくれてありがとうございます。」

このとき、2年生は初めて声を出して3年生の前で泣いた。

新チームになり、秋の新人戦を目指して練習するライオンカップ全国大会出場チームは、ずいぶんと元気になった。70%回復と言ったところか。

最初に顧問の先生に対して反抗の口火を切った生徒の母親は、昨年夏、家を出たきり帰ってきていない。また、レギュラーの中にも家庭が落ち着かず、精神的に不安定な生徒もいる。反

抗期で、自分の気持ちをコントロールできない生徒もいる。

しかし、これが現実である。我々は現実から目を背けることもできないし、テレビドラマのようなハッピーエンドを期待してもいけない。揺れ動く思春期の生徒たちは、善悪の判断を行いつつも、それと裏腹に動いてしまう自分と闘っている。

4.4 教員の思い

私は、生徒とつきあっていく上でもっとも大切なことは、

我が子をみるような愛情を注ぐこと

であると思う。我が子は、血がつながっているにも関わらず、否、血がつながっているせいか、思い通りにならない。だから、いらいらしながらも、仕方なしに期待して待つ。

基本的に中学生の指導も同じであると思う。「自分もそんな時期があった」と苦しみを分かち合い、しかし「結局、解決するのは自分しかない」ということを教える。そしてその時期が来るのを期待して、じっと待つ。

経験上、結果を焦ると「中学校だけの結果」に終わってしまうことが多い。何か問題が起こったとき、我々が生徒に求めるべきは「自浄力」であり、教員は生徒が自らを律し、最良の選択ができる力をつけるべく、あらゆる援助をしてやらなければならないと思う。

生徒にとってそのときは受け入れがたく、反発をしても、心の片隅に「この先生は自分のことを大切に思ってくれている」と感じる指導を心がけることが何よりも大切である。「突き放されている」と思わせてもよいが、「捨てられた」と思わせてはいけない。今回のバレーボール部の女子の指導の際は、このことを特に心がけた。

最近、休憩時間など、彼女たちは顔を合わせると必ず明るく話しかけてくる。私に口答えすることも多いが、深刻なものではなく、むしろ軽口を楽しんでいる様子が見受けられる。

自学帳³⁾に関しては、女子バレー部の中にはよく出してくる子もおれば、たまに出す者もいる。ただ、気持ちが切れている子は1人もいない。今回反発の口火を切った生徒は、入学以来ほとんど自学帳を出してきていないが、授業態度は良好で、課題などが自力でできると喜んでいる。

今回の指導を省みると、ある程度の成果は見られたと思うが、これは自学帳の恩恵が大きいと考える。私は今年度は1年生を担当しているが、日頃、自学帳を通してほとんどの生徒と会話を行っている上、自学帳を丹念にチェックすることによって、生徒は越えることのできない一線を感じている。

生活が豊かでなかった時代、子どもたちは親とともに働き、親に背負われながら労働することの大変さと、親の偉大さを肌で感じていたのに対し、近年ではサラリーマンである親が会社でどう働いているかを目の当たりにするチャンスは皆無に等しく、疲れてゴロゴロしている姿や、楽しみのため夜に家をあける親の姿ばかり見ている。

教員は、授業を工夫したり、自学帳を丁寧にみて助言や激励の言葉をかけてやることによっ

て、「働く姿」を直接見せることができる。しかも、生徒にとっては、「自分たちのために頑張ってくれている」姿である。

インターネットを始めようと思えば、周辺機器を整えなければならないのと同じで、授業を気持ちよく進めるためには、

楽しく分かる授業を用意する

生徒が自分のために頑張ろうとする気持ち
生徒が先生のために授業を頑張ろうとする気持ち

が必要であると思う。

新しく先生になられた人など、一所懸命にやってもなかなか生徒がついてきてくれないことがあると思う。そのとき、生徒たちは、「どんな先生」であるかを見定めているときであり、苦しくとも頑張りを続けなければならない。一所懸命にやっていたら、いつか必ず理解してくれるし、態度には出さなくとも、教員の頑張りをちゃんと評価してくれているのである。

泣きながらも、生徒のために頑張る

これが、教職に就きたてのころのあるべき姿勢であり、数年すれば、生徒と教員が「お互い、同じ目的に向かって頑張っている」という充実感を味わうことができるようになるだろう。

4.5 実践事例の教材化

この実践事例を教職志望の学生にそのまま与えた場合でも、もちろん何らかのヒントにはなるだろうが、前述した「客体化」「相対化」あるいは、「教員の心のゆとり」という観点から述べるならば、何らかの加工を施す必要があろう。何故ならば、教職経験の浅い新任教員や学生にとっては、実践事例を全体として丸ごと提示した場合、「すぐれた実践である」という漠然とした印象は抱くものの、その実践を支える原理、原則については理解が及ばない場合が多いからである。従って、上記の実践事例に限定して述べるならば、例えば以下のような観点からの教材化が不可欠と言える。

(1) 問題行動と問題状況を把握する

まず、解決すべき問題を学生に提示する。上記の実践事例では、関係する生徒のプライバシーの問題等を考慮して、この部分の記述が必ずしも十分ではないが、例えば、英語の授業中の生徒の問題行動という形で提示する、あるいはバレー部の部活動におけるトラブルという形で提示するなどが考えられる。いずれにせよ、具体的な問題（群）として学生に示す必要がある。解決すべき問題と同時にその背景に存在する要因についても情報を提示する。上記の例で言えば、小学校時代の人間関係が影響している等の点である。

(2) 当事者として自分なりの解決策を考えさせる

次に、個々の学生に、問題に直面した教員の立場に立つように促し、自分であればどのような対処をするかを考えさせる。当然のことながら、経験を積んでいない学生の場合、即座に対処方法を導き出すということは難しいことも考えられるので、グループやペアなどの形態を採用し、協同での学習(collaborative learning)の可能性も探る必要がある。

(3) 各自の解決策を提示し合う

(2) で考えた解決策を学生同士で共有させる機会を設定する。問題場面が特定されていれば、役割演技を取り入れて実演を行うことも試みてよからう。例えば、生徒役と教員役、同僚教員の役等を設定して行うのである。ここで留意すべきことは、学生に自分なりに解決策を模索させるということがこの段階の目的であるので、いずれが優れた解決策であるかの価値判断は避けるという点である。

(4) 実際にとられた解決策を提示する

学生達の提案した解決策とベテラン教員による指導との比較を行う。このケースであれば、4.2 に示した教師の7つの基本的な指導方針を提示し、それらに基づく指導のプロセスで生徒達はどのようであったかを描写する。さらに、指導後の生徒の行動を提示することにより、指導の有効性もより説得力を持つと思われる。

(5) 上述の実践記録を通読し、生徒指導の原則、原理を導き出す

実践事例を「すごい実践だ」で終わりにすれば、そこには発展性は望めない。実践から理論を導くことの重要性がしばしば指摘されているが、生徒指導においては特にこの観点が不可欠である。この点で、個々の実践事例から抽出できる生徒指導の原理、原則を学生に考えさせることが重要である。

(6) 教員の願いや思いを共有する

さらに、4.4 で示されている指導にあたった教員の願いについて触れることができれば、具体的にとられた解決策の背景もより十分に認識できるとと思われる。

一般的に、ベテラン教員が新任教員に助言を行う場合、生徒指導に限らず教育活動全般について「願い」や「思い」からスタートするケースが多いと思われるが、そうしたアプローチは経験を重ねていない新任教員には伝わりにくいと言える。むしろ、具体的な指導方法を提示し、なぜその方法が用いられたのかに関して考えを巡らせた上で、教員の「願い」や「思い」に触れたほうが、より説得力があると思われる。

5 結語

本論文では、中学校の英語科に限定して、教員養成段階における「生徒指導」に関して2つの提案を行った。具体的な実践を伴わない提案であるので、2つのアプローチの有効性については、今後の検証に委ねなければならない。

教育実習を経験した学生の意見に「大学では、もう少し実践的なことを学びたい」という注文が多い。「生徒指導」に関しては、特にこのような意見や注文が多いと思われる。「理論」と「実践」というdichotomyに筆者らは単純に組みするものではないが、「生徒指導」に関しては少なくとも「具体的な実践事例」に基づかない論は無意味だと考える。ただし、具体的な実践事例をそのまま受け入れるというのではなく、学生自身が主体的に解釈を行い、実践事例に内在する原理を発見し、理論構築をするという視点を失わないということも重要であると考えられる。本稿は、そのための第一歩である。

注

1) 例えば、以下の文献は比較文化としての「教育」を考える上で有益である。

Conduit, Anne & Andy Conduit *Educating Andy: the Experiences of a Foreign*

Family in the Japanese Elementary School System. 1996, Kodansha International.

Feiler, B. *Learning to Bow: an American Teacher in a Japanese School*. 1991,

N.Y. Ticknor & Fields.

White, M. *The Japanese Educational Challenge: A Commitment to Children*. 1987,

Kodansha International.

恒吉僚子 『人間形成の日米比較 かくれたカリキュラム』中公新書

石附 実 『教育の比較文化誌』玉川大学出版部

2) ALT (Assistant Language Teachers)の異文化適応上の問題に関する筆者(築道)の調査では、ALTの多くが授業中の生徒の問題行動とそれに対する日本人教師の指導(その場では直接的に指導しない)にフラストレーションを強く感じているという結果が出た。この結果は、生徒指導に対する彼我の違いに起因したものと判断される。詳しくはTsuidoを参照のこと。

3) 「自学帳」とは、家庭学習用のノートの呼称である。通常の宿題と異なる点は、課題内容を生徒自身が決定し、また、学習するか否かも生徒自身が決定するというシステムになっている点である。この点も詳しくは柳井(1994)を参照のこと。

参考文献

小島 勇「教師の指導力を飛躍的に向上させる『臨床指導研修方法』—実際の指導場面の再現、気づき、拡充、改善、変容を生む研修方法—」第7回日本教育技術学会発表資料(1993年11月21日、島根大学教育学部附属小学校)

田尻悟郎「生徒の本音と授業作り」『現代英語教育』1996年4月号、pp.16-18

築道 和明「教育実習時に教育実習生が直面する問題の分析—日記の記述を通して」『教育実践研究』第

6号、島根大学教育学部附属教育実践研究指導センター,1996, pp. 23-37.

三浦 孝「授業の『荒れ』にどう対処するか」『現代英語教育』1991年10月号、pp.12-14,p.18.

柳井智彦他 『自ら学ぶ子が育つ 英語科自学のシステム』1994年、明治図書

Johnson, L. *Dangerous Minds*. St. Martin's Paperbacks, 1992.

Tsuido, K. "An Analysis of Assistant Language Teachers' Perception of School-related Cultural Problems," unpublished manuscript.

Wadden, P. & S. McGovern, "The quandary of negative class participation: coming to terms with misbehaviour in the language classroom," *ELTJ*,45,2,1991,pp.119-127.